

The Characteristics and Orientation of University Students Who Do Not Have Reading Habits

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜島, 幸司 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1019

読書習慣のない大学生の特性と傾向

浜島 幸司

1. はじめに

本稿では読書をしない（読書習慣のない）大学生の特性をデータから明らかにする。これまで大学生は読書をするという前提で論じられてきた（メインカルチャーとしての存在）。大学生文化における読書は勉強文化と親和性が高いため、そのように論じられてきた。しかし昨今では「活字離れ」等で読書をしない大学生は多くを占めている。そこで読書をしない大学生とはどのような特性、傾向があるのかを実証的にみる。その指標に大学生の読書行動は読書習慣の有無を用いる。分析結果より読書習慣と勉強文化の関係はみて取れるものの多数を占める存在ではなくなっている。むしろ生活習慣、趣味的志向との関連性（サブカルチャーとしての存在）も視野に入れた大学生と読書に関する研究が必要となる。

2. 大学生と読書

全国大学生生活協同組合連合会が実施している大学生調査データを経年的に分析した岩田弘三は読書時間、書籍費の推移を根拠として、1960年代以降の2000年代の大学生文化は「勉強文化」から「遊び文化」へ変わったと述べる（岩田、2003）（岩田、2011）。読書時間は大きく減少し、さらに書籍費も年々下がっていることが確認されている。ただし「勉強文化」がなくなったということではなく、「生徒化」して「まじめ」になっている傾向があるとも述べている（岩田、2015）（岩田、2017）。

岩田が注目したように「読書」はかつての大学生であれば大多数が身につけている生活様式であった。大学の図書館に行けば書籍を閲覧したり、借りて読んだりすることができる。また教員の講義内容を補足するためにも関連書籍を読むこともできる。大学生といえば学業（勉強）に励むことが主たる活動である。その学業（勉強）に必要なツールとして書籍がある。書籍を読むことは学業（勉強）に励む大学生がおこなう日常の出来事として認識されている。この考え方はかつての大学生とは比較できないくらい社会状況、生活環境が変わった現在においても変わらない。

一方で現状をみれば大学生が読書に費やす時間、書籍費は岩田が分析したように年々減少し続けている。岩田は別の生活費の支出が増加していることを根拠に「遊び文化」への変動をみている（岩田・黒河内、2010）。大学生文化が時代の変化とともに移り変わったという岩田の議論に対し異論はない。ここで立ち止まって考えたいことは現代において読書時間、書籍費という指標がもはや「勉強文化」を代替できないものになってしまったのではないかということにある。ここで一例を挙げておきたい。以下は1973年に平賀増美（1973）が首都圏の5大学と1短期大学の主に文系学部生403名におこなった「読書」に関するアンケート

トの分析結果である。

本を読む時間の平均は62分で、1、2年と、3、4年とに分けてみると1、2年の平均は54分、3、4年は70分となり、専門課程に進むにつれて、読書の時間も多くなっている。また、1日3時間以上というものも全体の10%をしめているが、これに対して、全く読まないで過ごしているものが6.2%。しかも、これらの人たちは、全く読書が必要ではないと思っているのではなく、読書の方法や習慣が身につけていないため、読書の時間が生み出せないでいるようにみうけられる。(平賀、1973:38)

平賀の調査では400名ほどの回答者であるが、読書をしない学生は6.2%と少数派である。残りの90%以上の学生は1日に1分以上は読書をしていた。つまり日常生活に「読書習慣」があったということになる。読書習慣の「ある」大学生が大多数を占めている場合、その習慣の「ない」大学生については多く語られない。読書習慣の「ある」学生という前提で平均読書時間、所定の期間内で読んだ冊数、ジャンル・書名などを尋ねて、分析・報告されていく。

しかし40年以上の時間が過ぎ、後述するように読書習慣の「ない」学生が多くを占めるようになってきている。もはや少数ではない読書習慣のない学生はどのような特性、傾向があるのだろうか。これをデータで示していく。本稿では(本を)どれだけ読んでいるかという指標から一日の生活の中に読書がある／ないという「読書習慣」の有無に注目していきたい。この分析を通して現代の大学生の読書行動は「勉強文化」を示す指標ではなく、別の文化を示す指標ともなりうることを提起する。これは読書行動を大学生文化の分化としてどこに位置づけることができるのかという筆者の問題意識(浜島、2018a)と重なっている。また読書習慣がない学生の詳細を明らかにすることは、少なからず大学での読書に関わる教育支援、学生支援に対し、現状や改善を促すための資料提供にもなるだろう。

3. データから

3.1. 使用データ

2013年度から2017年度までの各年度に実施した全国大学生生活協同組合連合会の「学生生活実態調査」の回答個票を使用した。調査概要は各年度報告書参照のこと(全国大学生生活協同組合連合会広報調査部編、2018)。データ使用と分析結果の公表にあたっては同会より許可を得ている¹⁾。

3.2. 読書習慣のない大学生

まずは読書習慣のない学生がどのくらい存在するのか各年度の数値を確認しておこう。図1は1日の読書時間が0分の学生の推移を示したものである。2013年度には40.9%であった。この時点で4割に読書習慣がなかったことがわかる。その傾向は調査年ごとに増加していく。2014年度は41.7%、2015年度は45.6%、2016年度は49.8%、直近の2017年度で53.9%となっている。

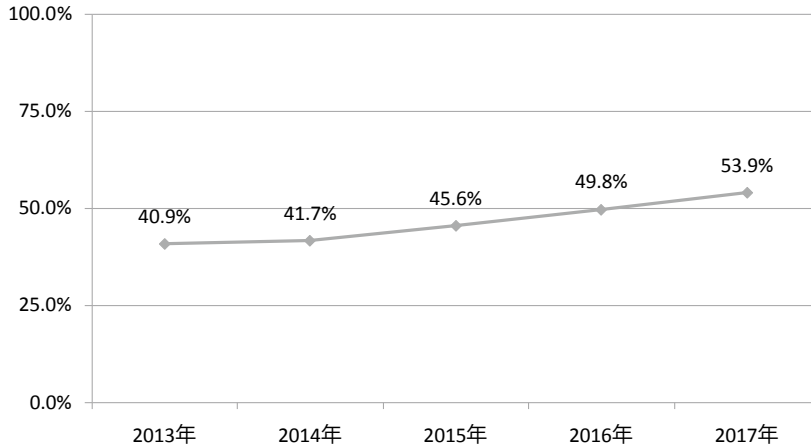


図1 読書習慣のない学生割合 (2013年-2017年)

この5年で13ポイント「読まない」学生が増加し、読書習慣のない学生が半数を占めるようになった。「0分」の学生を含めた場合、彼らの数が多いこともあり、読書時間の平均値も押し下げられていく²⁾。

3.3. 誰に読書習慣がないのか

次に読書習慣のない学生の属性および特性について、性別、学部別、学年別、大学生生活の比重別に特徴がないか分析した。各調査年度別にそれぞれの読書習慣がない割合を示したものが表1である。

性別ではすべての年度において大きな差ではないが、男性よりも女性のほうが読書習慣のない割合が多い。

学部別ではすべての年度において文系に比べて、理系および医歯薬系のほうが読書習慣のない割合が多い。特記すれば2014年度にすでに医歯薬系は50%を超え、2016年度で60%を超えた。また理系は2015年度には50%に届いていた。2017年度に文系も50%に迫っている。2013年度には3割ほどであった文系学生の「読まない」割合が5年間で半数を占めるようになっている。文系の読書習慣離れが顕著であり、それを上回る形で医歯薬系の読書習慣離れがみられている。

学年別では年度によって差はあるが、4年生以上に比べて下級学年のほうが読書習慣のない割合が多い。2017年度を除いて各年度ともに学年が下がるほど読書習慣がない。2017年度では4年生以上の半数に読書習慣がない。

大学生生活の比重別では「勉強第一」の志向を持つ学生は読書習慣がある一方で「アルバイト」、「サークル活動」、「交友・人間関係」、「ほどほど」、「なんとなく」を重視する学生に読書習慣がない傾向にある。2013年度の時点で「アルバイト」と「なんとなく」の半数で読書習慣がない。2015年度になると「サークル活動」、「交友・人間関係」でも半数を超える。2017年度では「サークル活動」、「アルバイト」、「なんとなく」で約6割となっている。さらに「勉強第一」の学生たちの読書習慣がない割合も5割に迫ってきている。文系学生で

の検討と同様に、「勉強第一」比重の学生たちの読書習慣離れが加速している。

表1 属性別 読書習慣のない割合（2013年-2017年）

		読まない (%)				
		2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
全体		40.9%	41.7%	45.6%	49.8%	53.9%
性別	男性	39.9%	39.9%	44.0%	46.8%	51.5%
	女性	42.1%	43.9%	47.5%	53.3%	56.7%
所属学部	文系	34.6%	36.4%	40.1%	44.5%	49.3%
	理系	45.0%	45.0%	48.6%	50.8%	55.4%
	医歯薬系	49.5%	50.9%	55.5%	62.4%	63.2%
学年	1年	42.8%	44.2%	48.4%	51.8%	53.0%
	2年	41.0%	42.1%	45.5%	51.8%	57.5%
	3年	41.3%	40.9%	45.7%	48.5%	54.6%
	4年以上	38.1%	38.9%	42.2%	46.5%	50.4%
大学比重	勉強第一	34.9%	34.9%	39.0%	43.9%	48.2%
	サークル活動	45.0%	48.9%	51.4%	57.3%	61.1%
	趣味	39.3%	36.4%	43.4%	47.2%	50.6%
	交友・人間関係	45.5%	45.7%	51.1%	53.6%	57.8%
	仕事や就職、資格志向	40.5%	40.8%	38.9%	48.5%	50.3%
	アルバイト	52.1%	51.8%	60.2%	61.1%	59.7%
	ほどほど	41.3%	42.3%	46.3%	49.7%	55.6%
	なんとなく	52.4%	52.8%	54.3%	55.8%	61.0%
その他	26.9%	37.5%	47.1%	54.3%	42.9%	

本調査では1日の読書時間のほか、勉強時間およびスマートフォン（スマホ）[2014年度より] 利用時間³⁾を尋ねている。それぞれの年度別に読書習慣の有無別での勉強時間の平均とスマホ利用時間の平均値を示した。

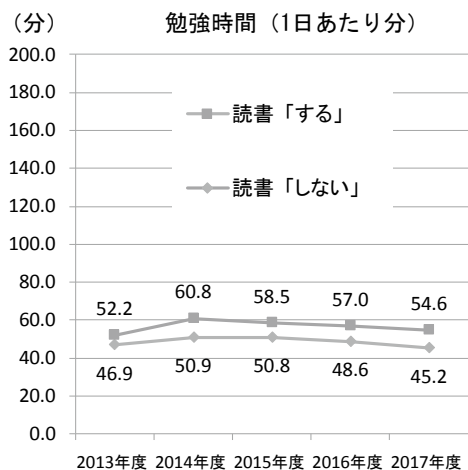


図2 読書習慣の有無別 勉強時間の平均変化(分)

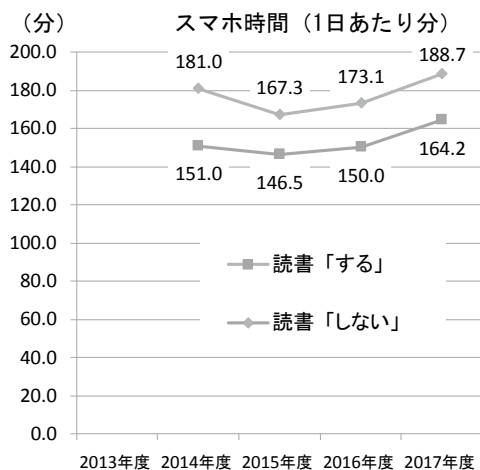


図3 読書習慣の有無別 スマホ利用時間の平均変化(分)

図2より2013年度より一貫して読書習慣のある学生に勉強時間が長い。読書習慣のない学生の勉強時間は短いですが平均時間の差は10分程度である。2014年度からその差は一定している。

図3より2014年度より一貫して読書習慣のない学生のスマホ利用時間は長い。読書習慣のある学生のスマホ利用時間は短いですが平均時間の差は20~30分ほどである。この差を短いととるか、長いととるか議論が分かれるところだが読書習慣のある学生も2時間30分ほどは毎日スマホを使っている(スマホを使わざるを得ない環境にいたるともいえる)。平均時間の差は2015年度にいったん縮まったが2017年度まで一定傾向にある。

さらに踏み込んでどの属性、特性に読書習慣が規定されるのか検討してみたい。従属変数を読書習慣の有無(今回は「あり」を1とした)で、独立変数に性別、学部、学年、生活比重、スマホ利用時間、勉強時間、通学時間を同時に投入してみた。性別は男性を1としたダミー変数、学部は文系を1としたダミー変数、生活比重は「勉強第一」を1としたダミー変数とし、学年、時間に関わる変数はそのまま投入した。各年度別の分析結果が表2である。

表2より各年度とも効果(B)の数値は異なるものの誰に読書習慣があるか、この4年度においてその傾向は一定であることがわかる。(B)が大きい順にみていくと、文系学部学生であること、生活比重が「勉強第一」であること、男性であることである。高学年であること、通学時間が長いこと、スマホ利用が短いこと、勉強時間が長いことも有意ではあるがその効果は大きいものではない。

表2 各年度別 読書習慣のある学生の規定要因(ロジスティック回帰分析)

従属変数は「読書をする」=1(「読書しない(0分)」=0)

	2014年度		2015年度		2016年度		2017年度	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
定数	-0.146	0.864	-0.354 **	0.702	-0.498 **	0.608	-0.590 **	0.555
性別ダミー (男性=1)	0.236 **	1.266	0.222 **	1.249	0.347 **	1.414	0.278 **	1.320
学部ダミー (文系=1)	0.614 **	1.848	0.572 **	1.771	0.528 **	1.696	0.494 **	1.640
学年	0.041 *	1.042	0.064 **	1.066	0.065 **	1.067	0.032 **	1.032
生活比重ダミー (勉強第一=1)	0.328 **	1.389	0.344 **	1.411	0.219 **	1.245	0.310 **	1.364
スマホ利用時間 (1日あたり分)	-0.002 **	0.998	-0.002 **	0.998	-0.002 **	0.998	-0.002 **	0.998
勉強時間 (1日あたり分)	0.002 **	1.002	0.001 **	1.001	0.002 **	1.002	0.002 **	1.002
通学時間 (分)	0.003 **	1.003	0.003 **	1.003	0.004 **	1.004	0.004 **	1.004
モデルカイ2乗	401.600 **		345.830 **		428.151 **		401.732 **	
-2対数尤度	11447.849		12465.018		12884.900		12830.372	
Cox-Snell R2乗	0.045		0.037		0.044		0.041	
Nagelkerke R2乗	0.061		0.049		0.058		0.055	
N	8728		9298		9604		9584	

* p<0.05 ** p<0.01

※ 2013年度は「スマホ時間」を尋ねておらず、本モデルで比較できないため掲載していない。

つまり本稿の目的に照らし合わせれば、読書習慣のない学生とは①文系以外（理系、医歯薬系）、②勉強第一以外の生活比重をもつ、③女性となる。2014年度から2017年度までの本データからは以上のことがわかる。

続いて本モデルに加えて、時点の影響を確認するために2014年度から2017年度のデータを合算し、調査年度をダミー変数（参照は2014年度）として加えた分析をおこなった。その結果が表3である。

表3 読書習慣のある学生の規定要因(ロジスティック回帰分析)2014年-2017年統合データ

従属変数は「読書をする」=1（「読書しない（0分）」=0）

2014-2017年度データ

	B		Exp(B)
定数	-0.156	**	0.856
調査年（参照：2014年度）			
(2015年度=1)	-0.175	**	0.839
(2016年度=1)	-0.314	**	0.730
(2017年度=1)	-0.481	**	0.618
性別ダミー（男性=1）	0.271	**	1.311
学部ダミー（文系=1）	0.550	**	1.733
学年	0.050	**	1.052
生活比重ダミー（勉強第一=1）	0.299	**	1.349
スマホ利用時間（1日あたり分）	-0.002	**	0.998
勉強時間（1日あたり分）	0.002	**	1.002
通学時間（分）	0.004	**	1.004
モデルカイ2乗	1858.445	**	
-2対数尤度	49653.061		
Cox-Snell R2乗	0.049		
Nagelkerke R2乗	0.065		
N	37214		

* p<0.05 ** p<0.01

表3からわかることは表2の結果同様、読書習慣のある学生は文系学部学生であること、生活比重が「勉強第一」であること、男性であることが確認される。さらに、2014年度を基準として2015年度、2016年度、2017年度ともにマイナスで有意な効果を示している。つまり読書習慣のない学生は2014年度と比較して2015年度以降強くなっていることがわかる。表3より、読書習慣のない学生とは①文系以外（理系、医歯薬系）、②勉強第一以外の生活比重をもつ、③女性、に加えて④2014年度以降となる。

3.4. まとめ

これまでの分析結果をまとめると全体でも2013年度以降、読書習慣のない学生が増えてきた。属性や特性を確認すると、女性、理系・医歯薬系学部、下級学年、生活比重が「アルバイト」、「サークル活動」、「交友・人間関係」を重視する学生であった。読書習慣の有無別に勉強時間、スマホ利用時間の平均をみたところ読書習慣の有無別による差異は確認できた

ものの長時間というほどではなかった。これらの属性を投入し読書の有無の規定要因をみたところ読書習慣のない学生とは各年度ともおおむね①文系以外（理系、医歯薬系）、②勉強第一以外の生活比重をもつ、③女性、であった。さらに時点を加えた分析をしたところ読書習慣のない学生は「2014年度以降」であることも明らかになった。

本稿では2013年度から直近の2017年度までの5回の調査データを使用して分析をおこなった。あくまでもこのデータのみであるが、読書習慣のない大学生の特性と傾向を把握した。読書習慣のない学生が増えている⁴⁾ ことに対して2つのことを触れておく。

1つ目は入学前に読まない学生が増えている（これまでに読書習慣のない生徒が多い）ことである。読書習慣のない大学生が増えていることを大学のみで考える必要はない。大学生文化へはそれまでの子ども期、高校時代の文化経験が大きく関わっている（浜島、2016）。読書習慣も初等・中等教育段階での読書への構えと大きく連動する。子どもの読書については腰越（2018）の研究が参考になる。学校生活のみならず、社会階層、家庭環境、地域環境、書籍をめぐる社会のありかたを含めた議論と関わってくる。

2つ目は大学入学後も読まない学生が増えている（学生生活で読書習慣の身につかない学生が多い）ことである。読書習慣の有無に対するスマホ利用時間の関連性は有意ではあるもののその規定力は高くはない。しかし社会全体においてスマホは日常のものとなり、それに伴う大学生の生活習慣が変わったことは考慮しておいてもよいだろう。情報収集は書籍に限らず、スマホ中心のデジタル化したものが日常風景となる。学習面でもその影響が想定される。図書を読まず、図書館や書籍部に行かずとも、授業を受けること、課題をおこなうこと、提出することも可能になる。学生だけでなく、大学教育も変容を遂げている。近年のアクティブ・ラーニングブームによるプレゼンテーション、コミュニケーション重視の授業形態によってリーディングへのウェイトが低くなってしまっているのかもしれない。読む環境がなくなった、読む時間がない、読みたいコンテンツがない（魅力、必要を感じない）なども読書習慣のない学生が増えた要因として想定される。

4. 読書がもつ多義性

大学生の読書習慣の有無を中心とした検討が本稿の目的である。では、そもそも読書とはどういう行動なのか。読書に関する研究は多様な分野から多彩な見解が寄せられている。研究の歴史も長く蓄積も多い。たとえば先に挙げた腰越の研究対象である子ども（家庭環境）に限らず、学校教育、図書館情報学の分野から読書に関する論考は多い。

読書の定義も論者によってさまざまである。ここでは社会学者の富山英彦が示した「文字メディアの線形的表現に基づいて意味を生成する実践」（富山、1996：83）を読書の定義として紹介しておく。紙に印刷された書籍に限らず、電子メディア上の文字を読み込む活動も読書として認めることができるからだ。

読書の機能とはどういうものか。図書館情報学を専門とする塚田泰彦（2016）は読書概念を3つのレベルに分けた。レベル1は読み方、レベル2は読解、レベル3は書物の読みによる人格形成や社会適応である（塚田、2016：509-510）。塚田によればレベル3がとく

に読書であるとみなされる傾向にある。さらに「読書は一般的に教養読書・情報読書・娯楽読書に分けられる」(塚田、2016: 510)という。対象とする分野・文章によって読み手の内容が大きく異なることについて明らかにしている。

教育心理学の立場から秋田喜代美と無藤隆は「読書も考える、空想するなどの知的機能を主な機能とするが、眠れない時に眠くする、疲れたり嫌な時に気分転換をはかるといった生理的機能や話題の本を読むことで友達と会話ができるなどの社会対人的機能も持ちうる」(秋田・無藤、1993: 463)と多面的であることを触れている。

生涯学習を専門とする村田文生(2010)は知的機能を重視している。「読書は書物を読みながら思索するという学習機能へのポータルと位置づけることができよう。生活を充実させ、生きがいを高めるためには、知識を広げ、深める行為は必要であるし、それは読書、思考の働きをおいて他には考えられない」(村田、2010: 67)と読書の有用性を説く。

図書館情報学を専門とする山本昭和(2010)は実際に読み手の読書の定義とはどういうものか、大学生と司書へのアンケートをおこないその違いを比較した。「ファッション雑誌を読むことは読書か、百科事典を引くことは読書か、携帯電話で小説を読むことは読書かといったことは、人によって考えの分かれるところであろう。こうした考えの違いを意識しておかないと、読書についての共通の論議ができない」(山本、2010: 113)との問題意識から26のカテゴリーを数量化Ⅲ類の手法を用いた。その結果、「ストーリー性」と「重厚性」の2軸があり分類できるとした(山本、2010: 113-121)。

読書の機能と有用性が多義的である中で、大学での読書実践が展開されていく。生涯学習を専門とする渡邊洋子(2017)は本が嫌いな人でもどのように本に親しむことができるか学内紀要に論考を寄せている。渡邊は「読書論」を示した書籍を紹介し、それに目を通すことが自分なりの読み方を探す手掛かりになると指南する(渡邊、2017: 8-9)。紀要雑誌への寄稿だけでなく、図書館、生協などでも各大学において「おすすめ書籍」、「読書フェア」など展開されている。図書館情報学を専門とする吉田昭子(2016)は初年次学生を対象とした授業で読書体験記を執筆させ、本への親しみをもたせる実践をしている。さらに授業後にも図書館に協力してもらい「読書体験記」で使用された本の展示をおこなっている(吉田、2016: 146)。学生の活字離れを少なくしたい実践として授業と課外を連動した読書促進運動である。

大学の授業においては読書習慣にかかわらず、読む能力なくしては個別の授業ひいては学部・学科のカリキュラムについてこられないのではないかという危惧がある。大学の授業に適応させるため、言い換えれば学生のアカデミックスキル⁵⁾ 養成のためにも読書を促す取り組みも存在する。高木悠哉ら(2012)は岡山県の私立大学生を対象に協同型読書プログラム受講者の受講前と受講後の読書に対する意識を検討した。協同型読書プログラムとは受講者に自分が図書館で借りてきた本を読了し、受講者の前でプレゼンテーションしあい、優秀者を投票によって決めるものである(高木ら、2012: 72-73)。1か月間での実施ということもあり、「行動としての読書量には結びつかなかったものの、読書に対するポジティブな態度や、メタ認知のモニタリング、メタ認知的知識を向上させることが明らかとなった」(高木ら、2012: 77)とし、初年次教育の教材として検討している。

このように読書に関する研究が多様であり、論者の視点によって主張も変わる。研究者に限らず、読書は多くの人が語ることのできる現象であり、多様な見方、理解、語りが存在する。大学生文化における読書の位置づけについても整理および議論が丁寧になされないまま現在に至っている。

5. 大学生文化と読書習慣

本稿では大学生文化の読書の位置づけについては先に示した岩田の一連の研究を参考にしている。岩田は勉強文化の代替指標として読書時間、書籍費を用いている。本稿では読書を勉強文化以外でも議論することが可能なのか、その提起をおこないたい。

大学生文化における勉強文化は中核的な位置にある（武内、2014）。大学生のフォーマルな文化（メインカルチャー）として学業（勉強）を中心としたものであることはかつて、そして今も変わらない。学業（勉強）はメインカルチャーとして注目されてきた。しかし、読書習慣は必ずしもメインカルチャーとは限らない。かつては大多数を占めていた行動であったとしても、現状では半数による行動となっている。むしろインフォーマルな側面として読書習慣を捉える視点があってもよいのではないか。メインカルチャーではなく、サブカルチャーとして読書習慣、行動を捉えなおすことはできないだろうか。アニメ、漫画、鉄道、PCなど趣味的活動と読書の親和性もありえることだろう。画像、文字情報を読むことと趣味的活動との関連性を検討してみる価値はある。すでに大学生の趣味活動に注目した研究もある（山口、2015）。サブカルチャー研究の枠組みに読書習慣も加えることを提唱してみたい。

読書習慣も大学生の選択しうるひとつの趣味的活動といえないだろうか。もちろん勉強に関連して教養を深めるために読んでいることも考えられる。しかし勉強の息抜きとしての読書、自分自身の趣味的活動としての読書として1日の生活の中に組み込んでいるのかもしれない。読書習慣の有無から大学生の生活様式の特徴や差異に迫ることができる。勉強文化とは違った諸価値との関わりをみることができるかもしれない。書籍などの文字・記号から必要な情報を彼らがどのように消費し、自身の生産につなげていくのか、その過程を質的調査手法などを用いることで読書習慣の中身をより詳細に迫ることも一案である。大学生文化の分化を多角的にみるためにも読書習慣は独特の文化指標として意味を持つのではないか。

6. おわりに

本稿では読書をしない大学生の特性をデータから明らかにした。かつてのように大学生に読書習慣があるという前提では議論できない。本データで示したように半数の大学生には読書習慣がない。読書を大学生のメインカルチャーとして捉えることには限界がある。確かに大学生文化における読書行動は勉強文化と親和性が高く、本データの分析からもその関係性は確認できた。むしろここで主張したいのは読書習慣もまた固有の文化（サブカルチャー）として捉え直し、読書習慣を通じて展開される彼らの生活様式、独特の生活習慣、とりわけ趣味的志向との関連性を深めていくといった大学生文化研究に対する視点の転換である。読

書習慣の有無によって学生たちの価値観・志向、交友関係など展開される大学生文化の分化を丁寧に明らかにすることが可能になる。

もちろん大学生と読書研究、とりわけ調査の進め方、データの収集についてはいくつか課題がある。3点挙げておく。①山本（2010）でも読書の定義について論点が提起されたが、どういう行動が読書となるのか、共通の議論をするための守備範囲の設定は必要だろう。すでに蓄積のある読書に関する定義と学生による主観的な定義が一致しているかどうかも含め検討の余地がある（例：画集、マンガ、電子書籍を読書とみなすのか否か）。②読書の機能（塚田、2016）（秋田・無藤、1993）でも複数提示されたが何を目的／手段として読んでいるか区分ける必要がある。知識を目的とするか、個人の趣味を目的としているのか、読書が持つ機能の違いを意識しなければならない。目的／手段によって読書の意味合いが異なる。③従来検討されてきた読書に関する数量（時間、数、金額）や質（分野、媒体）だけでなく、高木ら（2012）のように読書をしたことによる多面的な効果（アウトプット——これも客観的な指標と主観的な指標が存在する）もまた必要となる。速読により分厚い書籍を短時間で読み切ってしまうこともあれば、何か月もかけて読み切ることもある。また1冊を1回しか読まないこともあれば、1冊を何十回と読み返すこともある。さらに読んだ書籍の理解度も個人によって異なる。あらずじ程度しか覚えてない書籍もあれば、書かれた内容を逐一覚えている書籍もある。読書習慣の内実には迫るのであれば、数量的側面だけでなく、学生ひとりひとりの質的側面を視野に入れたほうがよいのかもしれない。

以上、2013年以降のデータを用いて読書習慣のない学生を明らかにしてきた。しかし読書習慣のない学生はその割合は少ないながらも2000年以前にも一定数存在していた。以前からも①文系以外（理系、医歯薬系）、②勉強第一以外の生活比重をもつ、③女性、に読書習慣がなかったといえるのだろうか。読書習慣のない学生たちの登場とその規定要因についても通時的に再分析する必要がある。

最後に大学で読書に関する支援をおこなう際には少しでも本知見が参考になればと思う。

註

- 1) 本稿執筆にあたり全国大学生生活協同組合連合会に委託事業としてデータ分析報告書を作成し、提出している（浜島、2018b）。そこでは主にスマホ活用と読書時間の関連性を分析し、両者の関連性の薄さを報告している。本稿でも報告書での分析結果を一部使用している。
- 2) 調査変数は調査票では●時間■分と記入するようになっているが、本分析では●時間に60をかけ、■分を加えた合計時間として再集計している。なお電子書籍も含んだ時間を尋ねている。読書時間（0分を含む）の平均は、2013年度は26.9分であったが、2014年度に31.7分と増えている。2015年度から28.8分→24.4分→23.6分と下がってきている。0分を除いた時間は2014年度に54.4分→52.9分→48.6分→51.1分となっている。読書を1分でもする学生はこの4年の間、1日に50分は読書にあてていることがわかる。
- 3) 1日あたりに変換した勉強時間（授業時間を除く予習・復習・課題作成など）の全体の平均は2014年度に56.7分、2015年度から55.1分→52.8分→49.6分と下がっている。大学生の勉強時間は1時間弱ほどであるといえよう。同じくスマホ利用時間の平均は2014年度で163.6分

ある。2015年度には155.9分と下がるが、2016年度に161.5分、2017年度に177.3分と増えている。直近では1日に約3時間スマホ利用をしていることがわかる。読書習慣とは異なり、勉強時間およびスマホ利用は大多数の大学生に習慣づけられたものとなっている。

- 4) 公益財団法人生活協同組合研究所の雑誌『生活協同組合研究』(Vol.508 2018年5月発行)では特集として「本を読まない大学生～大学教育と大学生協はどう関わるか」を組んでいる。執筆者と「タイトル」(掲載ページ)は以下の通りである。

吉田昭子「大学生の読書事情」(pp.5-12)

酒井邦嘉「読書は脳の想像力を高める」(pp.13-19)

佐々木俊介「いまどきの大学図書館と大学生の読書」(pp.20-26)

玉真之介「「リーディングリスト運動」を大学教育改革の中に」(pp.27-33)

- 5) アカデミックスキルとは、ライティング(書く力)、リーディング(読む力)、プレゼンテーション(話す力)、クリティカルシンキング(批判的思考力)、リサーチリテラシー(情報収集、分析力)などを指す。多くの大学で初年次の導入科目として独自の名称で科目設置されている。

参考文献

- 秋田喜代美・無藤隆, 1993, 「読書に対する概念の発達の検討—意義・評価・感情と行動の関連性—」, 『教育心理学研究』, 第41巻, 第4号, pp.462-469.
- 浜島幸司, 2016, 「子ども期の家族との経験が高校生活・大学生生活に与える影響—大学生アンケート調査分析から—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.6, pp.109-121.
- 浜島幸司, 2018a, 「「部・サークル活動」と大学生文化」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.8, pp.27-42.
- 浜島幸司, 2018b, 『大学生の読書時間減少の要因を探る—学生生活実態調査(2013-2017)データから—』, 全国大学生生活協同組合連合会委託事業.
- 平賀増美, 1973, 「大学生の読書傾向とその意識」, 『亜細亜大学教養部紀要』, 第8巻, pp.35-52.
- 岩田弘三, 2003, 「勉強文化と遊び文化の盛衰」, 武内清編, 『キャンパスライフの今』, 玉川大学出版部, pp.184-203.
- 岩田弘三, 2011, 「キャンパス文化の変容」, 稲垣恭子編, 『教育文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.26-53.
- 岩田弘三, 2015, 「『大学の学校化』と大学生の『生徒化』」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.5, pp.65-87.
- 岩田弘三, 2017, 「近年キャンパス文化事情—まじめ化する大学生と学生の「生徒化」・大学の「学校化」—」, 岩田弘三・谷田川ルミ編『子ども・青年の文化と教育』, 一般社団法人 放送大学教育振興会, pp.138-159.
- 岩田弘三・黒河内利臣, 2010, 「設置者別にみた学生生活費と学生文化の推移—全国大学生生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』データをもとに—」, 『私学高等教育データブック2010』, 私学高等教育研究叢書, pp.11-42.
- 腰越滋, 2018, 「データからみた現代の子どもの読書傾向—読書媒体の広がりに着目して—」, 『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』, 第69集, pp.55-68.
- 村田文生, 2010, 「読書の有用性についての一考察」, 『埼玉純真短期大学研究論文集』, 第3号, pp.67-73.

- 高木悠哉ほか, 2012, 「大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討」, 『環太平洋大学研究紀要』, 第5巻, pp.69-77.
- 武内清, 2014, 『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社.
- 富山英彦, 1996, 「読書における実践分析と言説分析—読書論分析の社会的意義—」, 『年報社会学論集』, 第9号, pp.83-94.
- 塚田泰彦, 2016, 「読書の現在」, 『情報の科学と技術』, 第66巻, 第10号, pp.508-512.
- 渡邊洋子, 2017, 「読書と学び—本との出会いを考える—」, 『京都大学生涯教育フィールド研究』, Vol.5, pp.1-10.
- 山口晶子, 2015, 「大学生の趣味とキャンパスライフ—オタク趣味に関する女子学生へのインタビュー調査から—」, 『The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, Vol.5, pp.119-135.
- 山本昭和, 2010, 「読書の定義に関する現代人の意識構造—学生と司書へのアンケート調査から—」, 『椋山女学園大学文化情報学部紀要』, 第10巻, pp.113-122.
- 吉田昭子, 2016, 「大学生と読書—大学1年生の読書体験記—」, 『文化学園大学紀要』, 第47集, pp.141-152.
- 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部編, 2018, 『CAMPUS LIFE DATA 2017 第53回学生の消費生活に関する実態調査』, 全国大学生生活協同組合連合会.

【付記】 本稿は全国大学生生活協同組合連合会委託事業（『大学生の読書時間減少の要因を探る—学生生活実態調査（2013-2017）データから—』）の研究成果での図表を援用しつつも、内容は表題にあわせて書き下ろしたものである。データ使用の機会と掲載をお認めいただいた全国大学生生活協同組合連合会広報調査部にお礼を申し上げる。